

アート アーティスト

報告書

2002

12/12 ~ 12/31

於
前アルレス

P1~7 記録
P8~15 個人の反省・感想
P16~20 係の反省・感想

SAC

2002年度 冬合宿記録（文責、佐藤）

12月21日

4:30 Box集合 13:15 1700m付近
7:00 葛温泉出発 15:30 1850m付近T.S
9:15 西尾根取り付き

冬期に高瀬ダムに行くには、葛温泉からの入山となる。葛温泉まではジヤンボ（横山勝丘）さん、ノック（横山輝生）さん、吾郎（野川謙介）さん（皆、あだ名だ・・・）に車を出してもらい、男三人に手厚く送り出してもらう。高瀬ダムまでは幕岩名物「イヤラシイ木」（必見です！）以外、何の変哲のない道を歩いてゆく。途中、幕岩に取り付くパーティーにどこに行くか聞かれ、「唐沢西尾根」と答えると「ラッセルに行くようなもんだな」と笑われてしまった。心の中で「本望だ」と叫んでやったが、本当にひどいラッセルにならうとは、そのときの僕らには知る由もなかった。西尾根取り付きは高瀬ダム隣の高瀬遂道入口上にした。ここから上がると送電線巡視路がしばらく続いているのでこれを利用する。送電線からは道はなくなり、さっそく濃密なシャクナゲ・ブッシュに突っ込むこととなる。登るにつれて雪は深くなり、「岩と雪」ならぬ一面の「シャクナゲと雪」であった。僕が思うにシャクナゲは数あるブッシュの中で一番いやらしい。地面から放射状に弾力性抜群の枝が壁のようにそそり立つ。なかなか高度を稼げない。時間いっぱい行動し、天場とした。

12月22日

7:15 出発 14:30 2150mコル
12:30 2286m小ピーク 15:20 2200mT.S

朝からシャクナゲ・シャクナゲ・シャクナゲ・・・。もうつつ、イヤ！！しかし、さすがのシャクナゲも高度には勝てないらしく、1900m付近からやっとその密度が薄くなってくる。そこから2280m小ピークまでは所々斜面がクラストしていてワカンだと少々悪いかもしない。しかしすぐにまた腰から胸のラッセルである。クラストとラッセルを交互に進んでいくとやっと2286m小ピークである。ここからの130mの下りが意外にも悪い。完全なるノーマークであった。尾根上は露岩でザイルを出さない限り通行不可能である。仕方なく、南斜面の急な樹林帯を慎重にトラバースしていく。コルに着いたところで天場を探したが、コル付近は両側共に急斜面で天場になりそうなところはない。50mアップしてやっとなんとか二張りはれる場所が見つかりそこで就寝。皆、早速濡れ始め、テント内に霧が立ち込める。

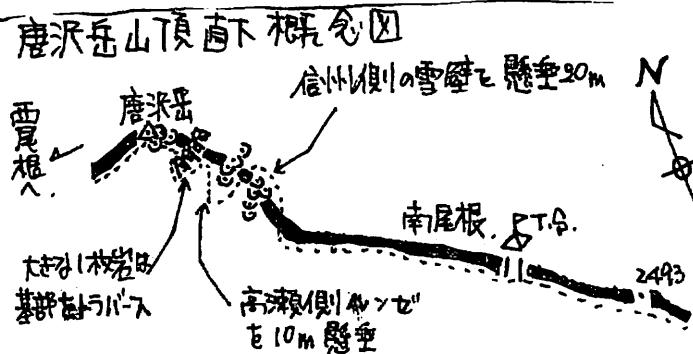
12月23日

6:50 出発 16:20 2483m手前のコルT.S
11:30 唐沢岳山頂
2450m付近からハイマツ帯となりやっと展望が開ける。唐松岳はも

うすぐそこであるが下りが明らかに厳しい様相である。いかにして攻略するか・・・。天気は上々。時間もたくさんある。行くぞ~~。

山頂への最後の登りはたいした事はないが、2500m付近では露岩帯である。ここは南側斜面から巻いたが、降雪直後はやめたほうがいい。ザイルを出して露岩から行くほうが良いと思われる。あとは尾根通しの急なハイマツ帯をひたすら登っていく。一箇所だけ草付にアイゼンで立ち込まなければならないところがあるが何てことはないが、念のためお助けショーリングをだした。

「ふ~」やっと山頂に着いたが気が抜けない。今日の核心はこれから下りである。山頂から尾根通しにしばらく歩くと下から見える大きな一枚岩にぶち当たる。これは簡単に岩の基部をトラバースできる。次の岩にぶつかると、雪のついていない南側のルンゼを少し下り、10mの懸垂下降する。懸垂終了点から硬く凍結した砂地を上がってくと、尾根に戻るがまた岩が行く手を妨げる。ここは北側斜面の雪がベットリついた雪壁にフィックスを張るが、フィックスを通過するうちにこの雪壁は雪が落ち、下からきれいなスラブが出てきた。これでは下れないで懸垂に替えるが、降り口と懸垂支点が大変離れており、今度はザイルの回収ができない。う~む、どうしようか。ない頭をフル回転させ、考えついたのが、とりあえず荷物だけ背負って下降し、空荷で登り返し、懸垂ザイルだけ回収し、他のザイルで確保されながら降りてきた。こんなに疲れる回収は初めてであった。ここを終えるとお助けを数度だし、雪崩斜面を下りやっと樹林帯に入ることができた。懸垂で時間がかかったのか、ルートを探すので時間がかかったのか、テントを張り終えたころにはすでに周りは暗かった。この日の夜、クリスマスには1日早いが耐え切れなくなってしまった差し入れでもらったケーキを開けた。ケーキはこの3日間の闘いを如実に語っており、ペチヤンコに潰れてしまっていた。しかし、味はケーキそのものである。うつ、うまい！



12月24日

6:45 出発	13:10 餓鬼岳小屋 T.S
9:30 餓鬼のコブ	13:45 FIX隊出発
12:50 餓鬼山頂	16:10 FIX隊着

餓鬼のコブは夏道沿いにすんなり抜けたが、この付近一帯はずつとラッセルが続く。雪はそこまで多くないものの、樹林と稜線が混じったような地形（ちょうど森林限界線に尾根があるせいだと思われる）にあり、倒木やら、ハイマツのおかげで歩きにくい。カツカツのアイゼン稜線歩きが恋しくなってきた。樹林帯を抜け餓鬼岳への登りは夏道が出ている。このころから吹雪き始めたが、荒れる前に餓鬼岳小屋に着くことができた。小屋から高瀬側の雪を掘って天場にしたが風をうまくよけることができる。快適。快適。

荒れそうだったが、まだ時間があったので僕と片寄でケンズリの偵察にいくことにした。最初は夏道沿いに進んでいくが、岩にぶつかる所で高瀬側の樹林に入る。雪崩斜面であるが露岩帯を行くよりはましである。ここに二箇所フィックスを張り、さらに先を見たかったが日没が近づき、風が相当強くなってきたので引き返すこととした。帰ると「お疲れ様～」っと、おやつの葛湯をつくって待っていてくれた。冬山で食べる物は「温かい=おいしい」である。寒さが増せば増すほどそうである。

12月25日

6:30 沈殿決定	10:30 FIX隊着
7:15 FIX隊出発	

依然として吹雪であるが午前は若干良いという予報であった。半日ではケンズリを越えることができないことを考え、本隊は沈殿としたが僕と片寄で昨日よりさらに先を偵察に行くことにした。二箇所のフィックスを越えてからはわかりにくく夏道を探しながら進んだ。高瀬側からはモクモクとどす黒い雲が近づいてくる。はやる気持ちを抑え、夏道をあっちこっち動き回りながら探していく。夏道沿いに行かないとたちまちいやらしくなる。空荷だといいが、本隊は無理だろう。しかし、夏道もハシゴや鎖場が多く出てきて注意が必要である。ケンズリ最後の下りは絶壁である。100mはあるであろう。この絶壁をみて、ここを越えようするとまた荒れだした吹雪に捕まりそうなので、ここで引き返すこととした。全く初見の難しさを痛感した。天場の選定には困るし、夏道もよくわからない。さらに、予想だにしないところで壁が出てくる。しかし、わからないからこそおもしろい。次々に出てくる困難をどう対処するのか。う~ん、快感(！？)

12月26日

沈殿。二つのテント間でエロ本戦争勃発。

12月27日

10:30 沈殿決定

沈殿。飢えたハイエナのように晴れを待つ。

12月28日

7:00 出発 12:30 2508m 手前のコル

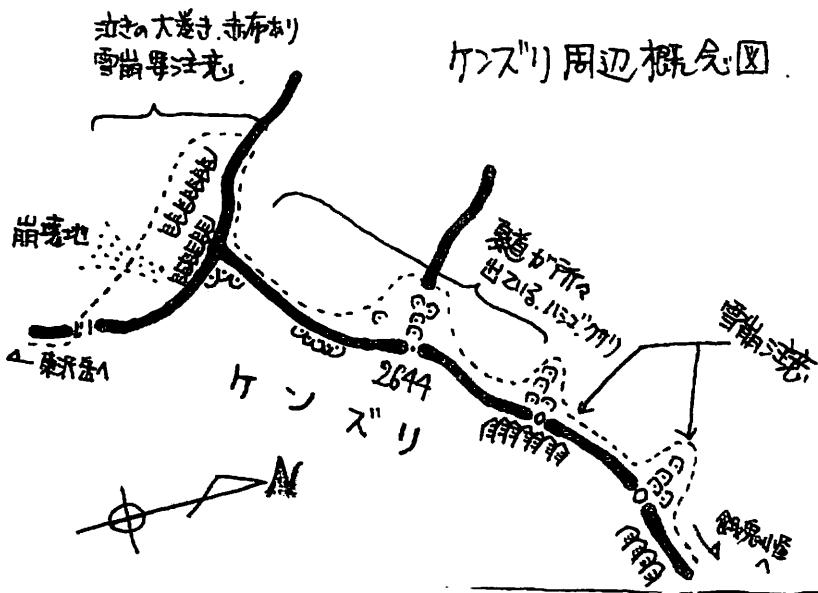
9:30 ケンズリ 16:15 東沢岳

16:45 東沢乗越手前 T.S

ぬふふ・・、晴れた。この日は工作隊（片寄、三森、滝沢）と、回収隊（佐藤、高谷、大橋）に分かれて行動した。工作隊がルートを開き、回収隊がザイルの回収をする。人数のいない僕らは本隊がないこの作戦で効率化を計った。24、25日の偵察が役立ち、絶壁まではすんなり行くことができて、ここで合流。さて、この壁を懸垂しようと思ったら2、3回は必ず必要になるし、下が見えない。かといって巻くのは果てしなく時間がかかりそうである。あちこち探したが巻くしか方法は無さそうである。仕方ない、絶壁を左手にその隙をずっと1ピッチに渡って降りていった。ふつかふかのハイマツの斜面でズボリ方が凄い。「どこまで下るんだ」と思うが左手には依然として壁がある。あまりに下るので不安を感じるころやっと壁がなくなり、ここから壁の基部をトラバースすることになった。このトラバース道はところどころに赤布がついている。しかし、雪崩斜面が多い。深いラッセルを慎重に進むと、樹林帯にぽっかり幅100mくらいの広大な雪の斜面が現れる。これにはびっくりした。見た目は「雪崩れる・・」といった感じの斜面なのだが歩いてみると何てことはない。なぜか表面が非常に硬い雪質で雪崩の心配はない。斜面上部を見ると岩が激しく崩壊しており、夏は崩壊地なのである。冬は木がないために風が強く、雪が飛んでしまっているのだと思う。この斜面をこえると樹林帯のコルに入り、長かったケンズリがやっと終わった。結局、最後の大巻きは2ピッチもかかってしまった。

「さて、あとは東沢乗越まで余裕だろう。」と高をくくっていたが、またもや東沢岳手前のピークで岩峰が現れ巻くこととなる。またまた雪崩斜面を木と木の間を縫うように歩いていく。一度、僕が偵察にザックをおろして踏み出した瞬間、「ミシシ」という嫌な音して、慌てて戻った。あっぶない。

この岩峰を巻くとあとは単調なクラスト斜面とラッセルの繰り返しであったが、時間が押し迫っているため、東沢乗越手前の信州側斜面でテントを張った。ここは風の影響が全くなく雪崩の心配もない。片寄の偶然の発見であった。たぶんこれから前も後もこここの天場を発見できる人はそうはないだろう。思わずSACの文字を書いた赤布を残置してしまった。



12月29日

7:30 沈殿決定

沈殿。午前中は吹雪いていたが、午後から晴れ間が射してきた。これからどうとう核心の北燕である。こここの通過は始めから一日中スカッ晴れを狙おうと思っていた。この上級生の少なさではしょうがないのだが、やはり晴れていて沈殿しているのは悔しい思いをした。

12月30日

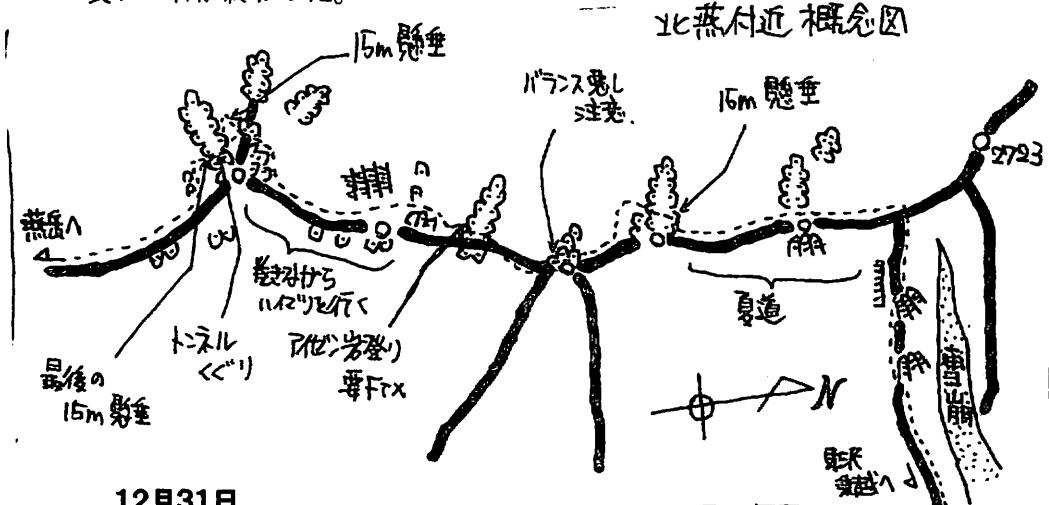
6:50 出発	10:15 北燕岳
7:05 東沢乗越	15:45 燕岳
	16:35 燕山荘 T.S

朝、晴れている。予報によると夕方から天気が悪くなるそうだ。急いで出発する。さすがに10日目となると一年生は雪に慣れラッセルも非常に早い。1ピッチで樹林帯を越えることができた。北燕の登りは下から見ると左右に1つずつ小尾根がありどちらも山頂に伸びている。右の尾根のほうが簡単そうだが雪崩斜面を渡らなければならない。左は大きな岩が二つほど飛び出していて悪そうである。どちらか迷ったが左の尾根に取り付いた。悪そうだと思われた岩は南側にハイマツがあり助かった。しかし、あまりにも南側に行き過ぎると雪崩れそうなのでなるべく尾根に忠実に行くことにする。二つの大きな岩を越えるとあとはハイマツを登るのみである。ひょっとして北燕の核心はこれで終わりかと淡い期待をもつたが、そんなことはやはりなかった。

北燕から燕は大小様々な岩峰からなり、予想通り今合宿で一番“渋い”所であった。ただその岩峰群は風化の進んだ花崗岩からなり、こここの独特的地形は確かに困難であるが懸垂やフィックスの支点に関しては事欠くことはなかった。一度もハーケンやナットを使わずに、岩角にひっかける

だけで良い支点が作れたのは幸いであった。北燕から夏道沿いにしばらく進むと、東に伸びる大きな岩稜帯にぶつかる。こここの手前で一本を取り僕と片寄でその先を見に行く。この岩稜を巻こうとするとかなり時間がかかりそうだ。仕方なく、稜線上から2,3m下ったところでその岩稜を越え、そこから15mほど懸垂する。終了点から稜線上にあがりまた岩峰があるが、岩と岩の間の狭い隙間を行けば稜線上からいける。隙間から草付、信州側の雪壁を慎重に降りると、目の前にはこれから通過するであろう岩稜帯ととうとう燕山頂が見える。しかも山頂の上には人が立っている。ここから信州側の斜面を行けば岩稜帯も簡単に越えられ、燕までが一直線である。しかし、雪崩れの匂いがブンブンする。眼前の岩稜帯を登って行く。立岩のアイゼン岩トレが役立つところである。こここの登りと下りにフィックスを張り大きなコルまで来たところで、僕と片寄は引き返した。本隊と合流してからはまた、工作隊と回収隊に分かれ進んでいった。懸垂、フィックスを無事通過し、ハイマツをつたって簡単そうな所ころから岩稜を巻きながら進んでいく。しばらく進むと南側に岩が切れ落ちている所があり巻くのも大変そうである。ここで工作隊と回収隊が合流した。片寄は東側に25mほど懸垂し、先を見に行っていた。僕が片寄のその先の状況を聞くとあまりよくないとの返事。どうも降りすぎたらしい。そこで、回収したザイルで南側15mほど懸垂し、登ってきた片寄と合流する。片寄はもう一本のザイルを受け取り、草付ルンゼを10mほど上がり稜線の一寸下から見えなくなった。すぐに帰ってきて、後15m懸垂1回であとは燕まで簡単な歩きだけだという。こここの懸垂は片寄がセットしてくれた。片寄が「ガッシャを取らなきや通過できないかも」と言うので、何かと思えばなんと岩と岩が積み重なりトンネル状になっている。しかも我等がガッシャブルム(120Lザック)が丁度はまるくらいの大きさである。2人一组でガッシャを下ろし、このトンネルを通過すると、眼前には登山道の整備された道が山頂へと続いている。ここから15mの懸垂で核心終わりである。1年生が懸垂、草付、トンネル、懸垂とこなし順次降りてゆく。皆、降りたころにはかなり時間が経過していた。燕へ最後の登り途中で吹雪始めてきた。核心でなくてよかった。やっと着いた。僕らは滝沢がこのために隠し持っていた“ゴミの出ない”クラッカーを鳴らし登頂を喜んだ。燕山荘につくとすでに暗くなり始めてきた。吹雪の中ブロックを積み手早く設営する。このとき、僕が小便をしに山荘に入ると客は皆唖然。僕も唖然。手にはバイル、腰にはハーネス、頭にはメットをかぶり、トランシーバーまで持っている。おまけに顔が汚い上に、くさいときた。年末営業中の小屋の中は外とは流れている時間がまるで違っていた。ある人はテレビを見ながらビールを飲み、店員は忙しく立ち回っている。ぬくぬくとした暖房があちこちに点在していた。ここはもう冬山などではなく完璧な下界であった。しかもトイレは水洗・・・。思わずトイレで寝たいと思ってし

まったくほどだ。しかし、外に出てみるとまだ皆、強くなりだした吹雪の中必死で設営に勤しんでいる。やっぱ冬はこれでなきやな。こうしてやっと、長い一日が終わった。



12月31日

6:50 下山決定

10:20 中房温泉

7:45 出発

14:40 宮城のゲート

8:15 合戦小屋

16:30 BOX 着

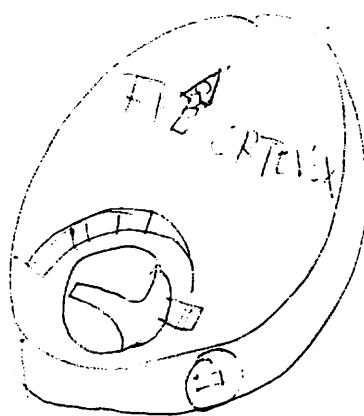
行くか帰るか非常に迷った。しかし、食料はギリギリ、年始は天候が悪いことがわかつっていた。去年、一昨年のことが頭によぎる。行きたい気持ちを抑えるのには苦労した。いつかまたここから常念ヘトレースをつけてやろうと思う。

合戦尾根は初日の出を見にくる登山客で大賑わいだ。途中、30人もの団体にも会った。まるで遠足のようだ。中房温泉から永遠と林道を歩く。林道終点で春寂寥を熱唱。いつもの事ながら、また誰かがハモッている。多分、Kくんではないかと思っているのだが、確証がない。帰りもまた、吾郎さん、ノックさん、ジャンボさんの三人に、車で迎えにきてもらう。松本に帰り、片寄・滝沢と浅間温泉に浸かった。体の芯から冷えていた自分に気が付き、合宿が終わったことを実感した。今日は大晦日。来年はいったいどんな年になり、来年の冬合宿はどこに行くのだろうか? 様々な想いがよぎる。

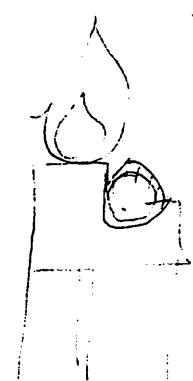
個人の

反省

感想



2027 vs 7月



-

冬合宿の反省と感想

大橋達也

ヤバくな、初日の本道 2ヒュウ目、またはじめたばかりなのに、ハテはしある自分を感じた。入山13日前に風邪をひき、熱は下がったが、腹の調子は悪くまだいた。是もとい、おぼつかない、歩きがい難くなっている。医者はそんな状態で山に行つても仲間に迷惑をかけるんじゃないと言っていた。だからといって自分で行つて決めて来たんだ。腹張るいなひた、炎死だつた。でも、4ヒュウ目、因縁をバテさせてはた。今まで、何をやってきたんだろ。体中の力が抜けた気がした。体調が完璧であっても、明るいなトレーニング不足、体力不足は言い訳のしようがない。それから、11日間、誰よりも軽い荷物を背負つていろいろなものもさす。人の半分もラップしてできていないにもかからず、一番迷惑をかけていた。同じ量のメシを食つてはる自分は、生きた心地がしなかつた。全く機能してはり、自分自身が、冬山のどんな厳しさよりも、ソラの下、これから、何を考えどのように行動するのか、自分の情熱に期待したい。

1年 潤澤 輝佳

合宿二日前に風邪をひいてしまい、連れていくつてももらえないのではないかと心配しつつ合宿当日を迎えるました。この風邪は結局最後まで治らず隊に迷惑をかけてしまいました。すみませんでした。合宿前の健康維持にもっと気をかけるべきでした。しかし逆に風邪には絶対負けたくないという気持ちが僕を奮い立たせました。せき以外にはまったく症状はなく、気合いでは健健康体以上でした。気合いを入れ過ぎて初日から腰ベルトのバックルを壊してしまいましたが、この程度ではまったく動じません。さっさとあきらめ肩の痛みに慣れてしまう事にしました。僕はラッセルを頑張ろうと思っていました。力を出し惜しみせず少しでも長く、速くトレースを作っていくというのがこの合宿の一番の目標でした。プレ冬よりも重いガッシャを背負い、唐沢岳の西尾根のズボリまくるいやらしい樹林帯を必死にもがきながら進みました。強敵はシャクナゲと倒木です。足場に何度も裏切られ、時に腰まで埋まってしまい身動きが取れなくなりました。それでもまた雪を踏み続け、雪の壁を崩し、膝でステップを作り、ワカンを蹴り込む。いつも筋力の限界よりも心肺の限界が先に来ました。ゼーゼー言いながらラッセルの交代をお願いしました。合宿前、スクワットなど瞬発力系のトレーニングは十分できたのですが、長距離走などによる心肺力系のトレーニングが足りなかったようです。寒くとももっとズクを出さなくては。このラッセルでは、道のない斜面に自分の意志で道を作つて行く楽しさを感じました。また隊のために道を切り開くという充実感もありました。長い樹林帯を超え、尾根から槍ヶ岳が見えた時は思わず「ウォー！」と吠えてしまいました。そして予定より1日遅れで着いた唐沢岳山頂から僕らの作ってきたトレースを見たときの感動は山頂にたどり着いたということ以上に大きいものでした。冬山ならではの感動です。真っ白い雪に覆われた快晴の北アの大パノラマに唯一見える道、僕らのトレースは僕らの意志であり、信大山岳会の存在を冬山に刻み込んでいました。

唐沢岳山頂からは岩稜帯が出てきました。岩峰の大巻き、懸垂、Fixも出て先輩は苦労していましたが、付いていくだけの一年生としてはなかなか楽しかったです。

もう一つ稀な経験をしました。ホワイト・アウトです。9日目の沈殿で娛樂係の僕が持ってきたオセロを片寄さんとしていたときです。盤面から片寄さん（黒）がどんどん消えて行きました。ミッキーと「片寄さん！」と何度も呼びました。しかし最後の一手で片寄さんは跡形も無く消え、64個全てのコマが真っ白になってしまいました。まさにホワイト・アウト。これには驚きました。

今回は残念ながら合戦尾根下山となり、厳しい稜線歩きはほとんど無く、飢えもなく、冬山の寒さもそれほど感じず、自分としてはまったくの不完全燃焼でした。僕の求める魂の叫びはありませんでした。しかしこれは一つのステップとなるでしょう。経験の積み重ねが僕をどんどん押し上げて行ってくれるのを感じます。その精神の高みはどこまで続くのでしょうか。「自分で自分の限界を作るな！」新人合宿で聞いた先輩の言葉が思い出されます。冬山という限られたものだけが踏みこめる領域に導いてくれた先輩と山岳会の伝統にあらためて感謝します。

冬合宿 反省・感想

三森武志

今回の合宿は初めての冬合宿ということもあって、戸惑うことも多かった。しかしそれにも増して、自分自身に厳しくあることができなかつた。初日、2日目はまだ合宿が始まったばかりで何事にも十分注意して行動することができたが、日を重ねるごとに注意力が散漫になっていったように思う。加えて、周りをよく見ていなかつた。直降や FIX 通過で先をよく見ずに進んだりしていた。どちらも体力に余裕がないことからくると思う。ラッセルにしても、冬山では体力が一番だと痛感した。あと、常に先を見て行動することを心がけたい。もしこうなつたらとか、この先どうなつているかとかをだ。なにも考えずにただ登っていただけでは、いつまで経っても上達は望めないだろう。

今回は好天の日ばかり行動していた。だからまだ自分は冬山をよくは知らないし、甘く見ているのだと思う。本当の冬の恐ろしさというものを知ってもいないし、遭ってもいない。そういう意味でもまだまだ未熟だと感じる。これで今年度の合宿は全て終わってしまったけれど、基本的なことはどの季節でも変わらない。3カ月後には新人が入ってくる。それまでにどれだけ自分を高められるか楽しみだ。



冬合宿を終えて

2年 片寄 哲生

上級生と一年生の人数が同じといつ状況での冬合宿。それなりにハードになるであろうことは覚悟していたものの、想像以上だった。そもそも上級生不足の理由から新人合宿・夏合宿と、5年生からのOBにまで手をかしてもらいつつこなしてきたことの弱さが冬合宿で露呈したのだと思う。やはり自分より上の人間がついていてくれると、気のゆみが生じてしまうようだ。まったく助力なしで挑戦した冬合宿ではます第一にそれを感じた。アレ冬合宿では予感しようのないものだったと思う。せせなら、3日間という短期間に上にその3日とも快晴。危険箇所も比べものにならないからだ。

こうして冬合宿前を振り返ってみて、より具体的に自分の力量と何ものかどのくらいであるかがよくわかった。同時に一年生の一挙手一投足に責任を負いつつ、一丁前の働きをする上級生としてはまだ力不足であることを認めざるを得ない。

これらのことを見つめ、いずれの稜線上の行動も好天をつけて通過しようとしたのは正解だったと思う。「せめて上級生がもう2人いてくれれば……」とは、山行中のリーターアで度々願ったこと一つ。この願いは、今年の一年生三人が無事に次の冬合宿までに育てはかなえられるはずだ。それが樂しみでならない。自分としても本チャンの経験を重ねることで、も、と迅速なFix工作ができるようにして、次こそは猛風雪の稜線をも行動できる力をもたらす上級生の一人に成長したい。これから山行が樂しみだ。

それにつけても、あの忙しさの中にはあても先頭を歩いてルートを選択していくおもしろさはたまらない。去年は「ルートをかぶて待つしかできなかつたのが、じんじん偵察に走れる。一年生3人も来年は走れる!! や走らねにゃならん。あー楽しうだ。

雪山は危なさもあるけどおもしろいね!!

冬合宿

2年 高谷 英太郎

山への取組み。今合宿を終えて、自分の今年度の山に対する姿勢を振り返してみると、自分自身でも決して満足のいくものではなかったなと後悔している。松本といふ山に行くには絶好の環境に身をおきながら、忙しさにからまけて山に行く機会が少なかった。その事が、山の総合力が伸び悩んだ原因となり、結果的に冬合宿で隊に迷惑をかけてしまった。ごメンナサイ。

山が好きで入った山岳会。自分の周囲には雄大な山々。自分は、松本に来時の新鮮な気持ちを思ひださなくてはならないと感じた。そこで、目標を明確にして、自分を律して来年度は山下真剣に取組みたいと思う。

来年の目標

フリーライミング

511を登れるようにする!!

本ちゃん

甲斐駒ヶ岳タグヤモント・アラシ・赤蜘蛛ルートを登る!!

冬山

冬剣に再挑戦!!

来年度、自分は3年である。そろそろというか遅いが自分の力で山に登れるよう、多加せずに自分で高めたい。そして、山に自分の存在を認めさせたい。とりあえす2月、3月は山に行きまく、山の総合力を上昇させようと思う。思う存分山を楽しみたいと思う。

冬合宿の反省・感想

(佐藤祐司)

今回の合宿は上級生の少なさに泣かされた。これにつきる。"が"別に後悔しているわけではない。この合宿は1年生から3年生で"成し遂げたからこそ、これからることを考えると、どうあそび"すか"とも思った。しかし、この少なさの中、初見で"あること、当场か"多かつて"ことを考えると、よく燕まで"行けたな、というか"正直な感想である。もちろん計画を消化できなかつたのは非常に悔しいが、人々が"多くのこと"を学ぶ"こと"で"すた合宿"であった。ここで"得た経験と発見した自らの弱さ"をこれから行動に生かしてほしい。

全体的に個々の能力の差がはっきりと浮き彫りになつた。冬合宿においては今までの山の経験や、下界での日々のトレーニング等、自分の集大成"が出る。ここで"細かいことは述べないが、自分自身で深く反省し、次に生かしたい。

1年生は皆、よくがんばつた。特に魂のこもつたうえには感動した。来年はもう2年生である。2年生に対する2年生の"仕事"と責任がある。来年には各自、それをきっちりこなして欲しい。今から竟意識してみよう。

2年生はさつきも述べたが"個々の能力の差"が出てきた。また竟言戦めにもかなりの差を生じてゐる。この春はどう変化し、成長するか期待する。

自分のリーダーとしての仕事はどうであつたか?"3つが、自分としては行動日数を多く増やせる"よかつたと感じられる。

初めて"あること。当場が多かった。上級生の数を考えると、と
時間がかかるのであることはわかったと思う。あと1日多ければ"…
専念まで"行けたで"あるう。う~ん、小高い。個人的で、前に
ガラニガラン出て Fix 3張、アリ、懸垂アリ等のみ樂しかった、アリ"ア
リーダーの仕事で"つなげることはわからなかった"、どうせア"るえがい"ね
流すアリニヒトア樂しませてもらつた。

～インセンス関して～

氷氣がも、と床いい。確かに、ヨミ"くみいし"人だ"ア"と。冬山でのと"か"動
くのは良くな。

音調味業斗が"タタキ"で"つなげ"る"ア"うか。シズ=シズ、ア"シ、コンソメ
さえあれは"こと足りる。ちと、ニリ可"か?

～装備に關して～

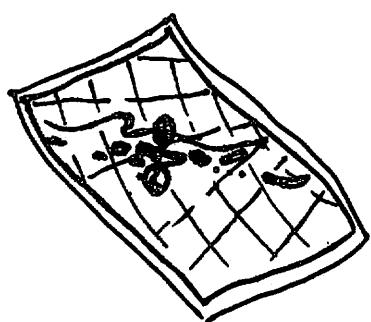
物とろえ係にアリ下サ"ア"感"ア"ある。アリの3張り柄、金銀板
等、到命ぬきものみいかい。も、と工夫つければ"タ"X。物とろ
え子ア"ケア"言葉で"もござる

OB、家族の皆様、今年の冬合宿も無事下山できました"ア"
されました。山へ行くときも、常に下の人たちが"自分たち"などを
考えていくくれる"を感じました。僕らが寝て山に登れる子
下ア"ア"子ア"ア"カ"ア"。どうもありがとうございます。

係からの

反省

感想



エッセンの反省

片島

今回のエッセンでは、夏合宿で非難ごうごうであった教訓を胸に、思考錯誤を重ねてのぞんだ。結果は概ね好評のようであったが、色々な意見を聞いて次のようにも思った。つまり、山にも、ついで食料の内容には限りがある。そしてそれからできるメニューにも限りがある。味の成否はつまる所、一人一人の好み次第といふこと。どうやら全員が満足になるエッセンというものはなかなかありえないようである。

反省

- マカボテがまたもや不評。
- 朝
 - ラーメン用トッピング(ワカメ・油揚げ)はずかた。
 - テルモス用の砂糖を用意したのもずか!
 - 行動の激しい日にはミルメークなどを組みこむのもよい。
 - 朝のラーメンに七味は不可欠!!
- 昆布茶などの和風おやつのつけは想像以上にすがた。
- あやつし 薄くなつてもヨリから水分をたくさんとること。
- 夜
 - ルーの類の汁を大きなペミカンにし、豚汁などでは乾物主体で小さなペミカンにしたのはよかた。
 - ペミカンの味つけは山中でのヒリがえしかつかない。メンツを熟慮した味つけを。
 - 水分摂取を重視するならルーの量を少なめに。
 - 3人で乾物250gはちどりたり。しかも汁が濃くなりてしまつ。
 - ぶりかけチリモ、お茶つけの素の類を用意した方が簡易の変わり顔となつてGood!!
- 調味料
 - 調味料袋はこつたかえすので整理の工夫が必要。
 - タニの素を入れるビニール袋は2枚使 Bairu shi.
 - 基本的に量が多かつた(特にコンソメ)。ペミカンが特大の場合には味つけの省略もできる。
 - 七味 & ヒリ辛スパイスは来年も忘れずに!!!

装備・気象・医療の反省

2年 高谷 英太郎

・装備

先輩にも指摘されたように、今回自分は『物そろえ係』になり下がってしまった。
装備係は、も、と考えながらその仕事を行わなくてはならない。

紛失したもの

腰ひも1、ショルダー1（懸垂下降で残置）

壊れたもの

ビーコンのプラスチック接合部
竹ボール

反省

- テント内の物干しのひもは、も、と細いもので。
- テントの張網は、しかりとしたものを。
- 竹ボールはも、と短い方が良いかも。
- トドライバーは小型・コンパクトなものを。
- ビーコンのプラスチック接合部は劣化し、壊れる恐れがある。要注意。
- FIXロープは50mのものを持つ、方が便利。
- 火器の銀板は、鍋をかぶさるものも、熱効率が十分違う。
- 自ガスは実働110秒がちょうど良い。

気象

高層気象は放送日をラジオ短波(03-3583-8151)で事前に確認しておこう。高層気象は、要勉強。勉強したら相当役に立つ。

医療

- ユースキン等、凍傷用薬は個装で。
- 医療缶には、個人では手を使せない強力な薬を入れる。
- 下痢止めは結構重要

会計報告

担当: 片寄

収入

合宿費	12000円/人 × 6人 =	72000 円
フレ冬 繰越金		10313 円
複合宿 繰越金		10370 円
OB から		5715 円
計		98398 円 ... ①

支出

食料系	40035 円
装備系	29449 円
送迎用カリシン代	12000 円
燕山荘幕営料	3000 円
計	84484 円 ... ②

$$\boxed{\text{残金}} = \textcircled{1} - \textcircled{2} = \underline{\underline{13914 円}}$$

残金は今後の装備購入用として会計系に預けることにする。

反省： これといった反省は思ひ当たらぬが、少々気がかりが残ったのが 食料代の額の大きさか。 レーション・昼食の経費がいつも多くなってはううで工夫の余地あり。

涉 外 係 から

片 寄

送り迎えの車を出していただき、先輩方、物心両面で
支えてくださいました。B 諸兄、ありがとうございました。

編集後記。

佐藤さんが現業やはいで僕らが
編集後記頼まれました。冬合宿が終わ
てもち食い過ぎて、ずっと体調が悪い。
Box のメソロの干し柿は 1 帆、てくると食べ場
にな、200. いいしかった。 鴻沢

編集用にのりを使おうとしたら凍っていてビックリ。
のりって凍るんだあ(片寄さん風)。只今僕の
一番暖かい部分で解凍中。 三森



印刷日 H.15.1.16
編集：佐藤
表紙：大橋